

がわかり、どんな感想を持っているかなどいろいろな視点から「見つめ、とらえる」努力をしていくことが重要である。しかしこれほど多岐にわたる視点で「見つめ、とらえること」は難しいし、不可能である。何かひとつを継続して「見ること」により、子どもの学習への取り組みへの実態を具体的な姿で理解できるようになる。

「見ること」から始まる児童・生徒理解は、「見る」ことによりさらに深まる。目で見ることに、教師の手が加えられること、目と手で「見る」こと、つまり、子どものノートを目で見ることに加えて教師の手で○や朱書きが添えられることである。「良くできてるね」と頭をなでてやる。

「もう少しでできる、がんばれ。」と肩をたたいてやる。ちょうど母親がわが子の元気のなさを見てとって「熱でもあるのか」と額の熱の具合を見る。あの手である。手には母親らしい、わが子を思う温かな心が込められ、母の手から母の優しい心が子どもに伝わる。

学校の授業、すべての教育活動においても教師が自分の目で子どもをよく見つめ、その子の姿を目敏く見取り、積極的に教師の思いを込めた手をさし伸べることは、小・中・高等学校を問わず極めて重要な教師の仕事である。授業で子どもが学習する姿をよく見つめ、あの子を、この子を何とかしたいと思う心を手に託して伝えていくこと、失敗したり成功したりすることなど、本当に些細なことに一喜一憂するか弱い児童・生徒に「うまくできたぞ」「すごいぞ」と肩をたたいてやること、「心配するな、この次がんばれ」と頭をなでて励ます教師の手には、その教師の子どもたちを思う心が込められている。子どもたちはそれを敏感に感じ取り、「先生は僕のことを心配してくれている」「応援している」と先生の思いを理解する。このように教師が、自分の目と手で子どもたちを理解することは、教師の目と手を通して子どもたちが教師の思い、心を感じとることになる。

児童・生徒と教師が相互に理解し合うことは、授業のみならず様々な教育活動の要諦である。

「授業が変わる」きっかけになるものは、このような児童・生徒理解に根ざした教師自らの「授業の再点検」ではないだろうか。「この子がここでこんなつまづきをしている。あの子はここができていない。何とかしなければ」「あの子はこの次こんなことに挑戦したいと思っている。何とか実現してやりたい」「授業はこれでいいのか。」教師のこんな思いの強さが、授業を変えるきっかけ、エネルギーになるのである。そして、この確かな児童・生徒理解が、教師自身の自己改革へのエネルギーになるものとする。

(2) 授業の何か1つを変えようとする

先に2(2)で、授業は総合的な仕事だから変わりにくい、変わらないと述べた。若い教師に、授業の準備ができたかどうかを尋ねて、「板書はできたかな。」「板書ができれば、授業全体が見通せたことなんだよ。」と先輩の先生が話す。板書だけでなく、授業の1つ1つは、皆連動し合っている。従って、授業は、何か1つ変えることによってすべてが変わっていくことにもなるのである。

挙手した子どもを頼りに指名していた教師が、「手を挙げられる子どもとしか勉強していないようでおかしい。」「何とか指名の工夫をしなければ」と考えて、挙手を頼りにしない指名で授業を

